

## 小説同人誌評 37

今回は『白鴉』か、  
『mon』か

細見和之

今回は前回よりもさらに多くの雑誌が届いた。コロナ禍がかなり落ち着いて、京都など観光客で溢れかえっている。それでも、ロシアのウクライナ侵攻は終わらない。まわりではややこしい人間関係が渦巻き、私もそれに巻き込まれ、精神的にかなりまいってきていた。そんななか、DVをはじめ、解きたい人間の絡みを描きながら、その先を見とおそうとする作品に今回出会えて、かなり慰められるところがあった。

『白鴉』第33号の巻頭に掲載されている、『四百字詰め換算一三三枚の、蒔田あお』『エリザベトを選んで』はそういう作品の代表と呼べる(以下、同誌の作品枚数は目次により、『四百字詰め換算』は省略)。

主人公の土屋珠季(まき)は精肉を卸している会社に十八歳で就職して二十二年。いまは四十歳なっている。小学生のときに父親が家を出てゆき、高校三年のときには母と弟が

無理心中し、一人暮らしを続けてきた珠季だが、同じ会社の十九歳年下の陽平と結婚することになっている。結婚式は挙げないつもりだったが、社長から結婚式を挙げるようにいわれ、教会で結婚式を挙げるために、二人で結婚講座にも出かける。

結婚後二年目に珠季は男の子を出産し、その五ヶ月後、陽平が得意先のスーパーのマネージャーを殴って会社を解雇されてしまう。陽平が育児を担当することになるが、自らがあまりに子どもっぽい陽平はまったくあてにならない。そんななか、珠季は体調を崩してゆき、ある晩、救急車で病院に運び込まれ、脾臓癌の末期にあることを宣告される…。

このように、まったく救いのない物語のだが、私が慰められたのはその先だ。珠季は同じ病院で、結婚講座と結婚式を担当してくれた牧師と出会う。牧師も末期癌で入院している身だった。珠季と陽平はその牧師のキリスト教講座を病院の休憩所で受けるようになるのだ。

互いの言動に振り回される水平的な人間関係のなかで、宗教的なものにはなお可能性があるのではないが、このよっつかいな物語に新訳聖書の言葉を繰り返して挿入している作者に、私はエールを送りたくなったのだ。

同誌掲載の、大新健一郎「不時着」は一三

四枚の作品で、近未来の政治とマスコミの関係を描いて、一気に読ませる。

主人公の宮島孝一は、帝国通信社の課長。すでに八尾空港に米軍基地が設置されて二年目を迎えるようとしているなか、その開設二周年記念のイベントを任されている。米軍は八尾空港に続いて但馬空港での基地開設も視野に入れている、八尾基地の成功を内外にアピールすることが最大の課題なのだ。宮島はその仕事を恙なく果たすことによって、東京本社への転動を目論んでもいる。

そんなとき八尾基地で米軍のヘリコプターが墜落し、老人施設を破壊してしまう。米兵は墜落前に脱出したが、老人施設で三人が死亡、二人が重傷という惨事だった。この墜落事故を「不時着」と称してマスコミ、SNSなどからもみ消すことが宮島の仕事となる。

ネット工作用のウェブサポーターが他人の記事にちゃちゃを入れ、海外の会社がフェイクニュースを作成し、また大きな放火事件が起こるなどして、墜落事故のニュースは下火になる。しかし、老人施設で父親を亡くした女性、鈴木里佳子が現われる。賠償金で丸めようとする宮島に対して、鈴木は事故の原因究明を強く訴え、彼女のインタビュー記事が辣腕ジャーナリストによって雑誌に掲載される。最終的に、いつさいの責任は宮島個人に負わされ、宮島はすべてを失ってしまう…。

政治と経済の複雑な癒着を背景に、近未来の物語をこれだけきびきびと展開してゆく作者に、いつもながら感嘆させられた。

同誌掲載の、水無月うらら「大根犬」は一八枚の短篇。胴体は犬、頭は青首大根を思わせる不思議なぬいぐるみとの共棲を描く。

あるとき映美（えいみ）は、以前から気になつてきた中古の家具家電を扱っている店先の「何か白いもの」を持ち帰る。それが「大根犬」だった。最初はただのぬいぐるみだったのが、次第に生き物としての存在感をましめてゆき、現に動くようになり、映美のまざれないパートナーと化してゆく…。

「大根犬」はなんの寓意か、と問いかけても仕方がないだろう。このイメージを追いかけてどこまで書けるか、そういう実験でもあるだろう。パステルで描かれた、明るいカフカのような作品世界だ。

同誌掲載の、藤本紘士「うまれるところ」は、八二枚の作品だが、三つないし四つの場面がモニタージュスされている。いちばん鮮明なのは、後半に描かれている、一九四八年四月の「阪神教育闘争」の場面。当時全国に開設されていた朝鮮学校に対してGHQを背景に、日本政府によって閉鎖令が出され、それに対する抗議がとくに神戸と大阪で大きな盛り上がりを見せ、大阪ではひとりの在日の少年が射殺されるにいたつたのである。

この場面に、現在の朝鮮学校に対するヘイトスピーチ、ヘイトデモと、それに抗議する朝鮮学校側、またカウンターデモなどの場面が重ねられている。こちらはいわばカメラが相当アップになっていて、すでにしてかなり分かり辛い。さらに、作品の前後を挟みこむ形になっている洞穴の場面となると、正直私はお手上げである。作品のタイトルはこの洞穴の場面に由来していると思うのだが…。

作者がきわめて意識的な書き手で、筆力が旺盛であつて、これが問題作であることは疑いないだけに、このモニタージュの難解さが少々私には歯がゆい。

同誌巻末掲載の、美月麻希「マッスルメモリー」も主人公の夫のDVを扱っている。

作品は綱引きの練習の場面からはじまる。「わたし」の勤めている会社には綱引きのチームがあつて、地区予選に出たりしているのだ。そこに新しい監督として高瀬隼人がやってくる。高瀬は仕事がよくできるうえに、トライアスロンで体を鍛えているという噂だつた。その高瀬がしきりに「わたし」に近づいてきて、とうとう結婚してくれという。「わたし」は母と二人暮らしで、結婚はできないと答えると、「かわいそうに」と高瀬はいう。くわえて、自分には離婚歴があると高瀬は打ち明ける。

出会つて三カ月ほどのプロポーズに「わ

たし」は戸惑う。綱引きチームの仲間相談して、高瀬の危ういところも知るが、結局結婚してしまう。しかし、次第に高瀬の本性が現われてくる。結婚後、「わたし」の母に月二十万円を渡す最初の機会に、高瀬は母に三指をつけて土下座することを半ば強要する。高瀬が管理しているアパートの集金の仕事を「わたし」に押し付け、さらに「わたし」が夕飯にお惣菜を買ってきたとき激怒して、「わたし」は脇腹を殴られる。

それでも「わたし」は息子を出産し、物語は一気に、その息子、亮太が大学院の修士課程を終えて東京へ就職する場面が変わる。ともあれ、それまで「わたし」は高瀬との関係に耐えてきたのだ。その間、亮太はおばあさんに育つていて、最後は亮太と「わたし」の母による高瀬への報復の場面となる…。

作中に「筋肉は裏切らない」という言葉が登場するが、それは「ひとに較べて」ということでもあるだろう。実際、「わたし」がジムで筋肉を鍛えている場面がこの作品でいちばん爽快感に溢れているのだ。

ここまで『白鴉』第33号の作品を紹介してきた。これだけ紹介したい作品が掲載されているのだから、今回は同誌がベストと言いたくなるが、今回届いている『moon』にもよい作品が並んでいる。第20号ということで、同人のほか、これまでゲスト参加してきた執

筆者など二十名が、タイトルに何らかの形で「moon」という言葉の入った、二十枚の短篇を寄せている。短篇はこう書けというモデルのような作品が目白押しである。全部は紹介できないので、とくに印象に残ったものについて簡潔に記す。

津木林洋「ハンモンク」では、妻の麻美(あさみ)が鬱病になる。それを癒やすために夫の俊二はハンモンクを購入することを思い立つ。

やがて二人はそのハンモンクを野外に持ち出す。俊二は手ごろな大きな木を見つけ、ハンモンクを吊るす。そこにスマホのカラオケで演歌を歌っているおじさんが登場し、二人との交流が始まる。麻美はおじさんの勧めで、自ら歌を歌ったりする。そのおじさんが「ハンモンク」のことを「ハンモンク」と発音していたと麻美は言う。

これがタイトルの由来だが、ほのぼのとした物語のうえに、「ハンモック」と「ハンモンク」のささやかな違いから、作品が生成してくる舞台裏まで教えられる気がした。

福田純二「一門の葛(かずら)」は一転して、南北朝時代から室町時代にかけての歴史小説。藤原定家に連なる和歌の名門、二条家の最後小に位置する為右が二条家で和歌が途絶えた経緯を一人称で語る。

ある日、和歌よりも武芸に関心のあった「わ

たし」は、琵琶の音に惹かれて、その琵琶を弾いていた「姫君」良子に、久しぶりに和歌を贈る。良子から返歌もあって、「わたし」は和歌指導にあたるようになったが、やがて良子がのちの将軍、足利義詮(よしあきら)の子を懐妊したため、「わたし」と良子の関係は途絶える。

為右というマイナーな人物にそくしながら、和歌の解釈までふくめ、よくこれだけ書けるものだとこれまた私は感心してしまった。

飯田未和「いいもん」は、緩和ケア病棟で衰弱し死にいたる父親の姿を、娘である「私」の視点でたんたん描いている。

四年におよぶ化学療法をへて父親は緩和ケアを受けるしかない状態。かつて大学でフランス語を教えていた風格は残っているものの、ないはずのものが見えたりする「せん妄」症状も起こしている。食べたいと言われて買ってきたコロッケも、「コンクリートを嚙んでみたいや」と受けつけられない。最後、父親の同意のもと主治医によって鎮静薬が注人され、夜明けに父は静かに息を引き取る。

父の死においおい泣く男性の看護助手「藤江さん」、「私」の娘二人(父親にとっての孫)の元気な姿が印象的だ。

青木和「ももんじ屋の客」は、鹿肉や猪肉料理を食べさせる、江戸時代の「獣肉(ももんじ)屋」を舞台にした見事な短篇。

徳三という男が江戸の麹町で獣肉屋を開き、娘の「せい」がその手伝いをしている。そこに猟師の加平から、ひどい臭い見慣れない肉が届けられる。すると不思議な女が現われて、加平の届けた肉を食べたいと言う。女は味もついていない肉を貪り、あすも来るといつて金の小判を置いてゆく。せい目当ての夕子の悪い常連客、羽田はその肉をひと口食べて七転八倒する破目に陥る。

きびきびとした話の展開、簡潔な文体も合わさって、この作品は新しい民話としての魅力に満ち溢れている。

岩代明子「門限のあとで」では、三十年代半ばの姉と弟がたこ焼きをつつきながら言葉交わす。

「私」のもとに、メキシコに暮らしている弟、時男がやって来る。五年振りの再会だ。時男はたこ焼き器まで持参して巧みにたこ焼きを作りながら、結婚することを伝える。二人の両親は父親の浮気が原因で離婚していたそれにまつわることで時男には姉に申し訳ないと思ってしまうことがあった。それを伝えることが姉のもとにやって来たいちばんの理由だったようだ。

子どものとき家の門限は七時だったが、その門限のあと、時男はよく家を抜け出して夜空を見上げていた。物語の最後、星空を見上げて歩いている二人の姿がとても印象深い。

大梅健太郎「入門の友」は、五歳の娘に、不思議な友だちができる話。

ある夜、「僕」は妻から、誰かと話しているような独り言を娘が口にしていて、と不安気に告げられる。「僕」が注意して見ていると、確かに娘は誰もいない空間に話しかけている。しかも、その「友だち」は「お父さんが子供の頃に一緒に遊んだ」と言い、「僕」が好きだった絵本、よく絵本を読んでいた場所まで覚えていたのであった。受け取りようによつては不気味でもあるが、「僕」はむしろ娘とともにその「友だち」とコミュニケーションする楽しさを感じ、相手の名前を「本の虫」と聞き出したりする。

絵本と子供が織りなす、文字どおりファンタジックな世界。

と、このように六人の六篇を紹介したが、二十号記念に二十人の作者の、各二十枚の短篇を掲載するという、二十尽くしの、じつに見事な企画ぶりだった。

『飢餓祭』第50号掲載の、秋元潔「うせものさがし」は、私の計算では三百枚を越えていて、今回読んだなかでいちばんの長篇。

三十八歳、独身の彰夫は「うせものさがし」という変わったオフィスを開いている。探偵事務所のようなものもあるが、失くした昨日の記憶を取り戻して欲しいという、認知症のはじまりかけた老人、「本当の顔」を失くしたとい

う二十八歳の女性など、およそまともな仕事になりそうにない客ばかり。小説家としてデビューしなから行き詰っている若い早坂もそんな客のひとつだった。

オフィスには、梨沙という大学生が無給でときおり顔を出して手伝ってくれている。梨沙は社会学を専攻していて、こういうオフィスを手伝うことが勉強に役立つという。その梨沙のことを早坂が好きになり、梨沙と早坂の關係が物語の一つの軸になる。さらに、娘を吞んだくれてDVの夫のもたら実家の自分のところへ帰宅させてほしいと依頼してくる父親があつて、その娘、火見子と彰夫の關係がもう一つの軸になってゆく。

最終的には、彰夫と梨沙は冒頭の彰夫の夢をなぞるような形で結ばれるのだが、そこにいたるまで、話は二転三転してゆく。もとより、単純な善悪二元論でひとを裁断することなどできないのだが、この作品ではそのことが粘り強く追究されている。

それぞれが背負っている過去、不器用な現在、見通しの利かない未来、この三つの時間に翻弄されながら、各自が精一杯生きている。その姿をこの作品は多面的に描いてきて、最初に記した慰めを私はここからも得たのだった。作品の末尾で彰夫は自分の家系でキリスト教がそれなりの影響をおよぼしていたことを確認するのだが、その点は、今回最初に紹

介した蒔田あおの作品と共通している。さて同誌は「50歷程号」として、十一人の同人が一〇枚程度の短篇と「飢餓祭の私」というエッセイを寄せている。短篇では、精神病を再発させて死んでゆく父親の最後を娘の視点で描いた、須藤薫子「ダウト」、昭和五年大恐慌へ向かう時代を背景に、盆踊りの風景を幻想的に描いた、夏当紀子「月に舞う」がとくに胸に響いた。

『あべの文学』第35号掲載の、高球基「つなぐ旅」は、一九九一年、朝鮮籍のまま韓国を訪れる「故郷訪問募参団事業」に参加した者の視点で、訪問事業のあらましとそのなかでゆれる参加者の思いを丁寧を描いている。

主人公、正敏（まさとし）のもとに八十歳を超えた父親が電話を掛けてきて、「募参団事業」で韓国の故郷を訪れたいという。一方日本生まれの正敏に韓国への郷愁はないが、日本への「帰化」のことを、これを機会に父親に告げたいと思っている。就職差別をはじめ苦しい体験をしてきた正敏は、息子には同じ思いをさせたくないと願っているのだ。

ソウルの観光地をめぐり、父の故郷を訪れ、親戚と言葉を交わし、ということを続けるなかで、正敏も次第に「この大地と深くつながっている」という感覚をおぼえるようになる。その間、父と正敏が親戚から受ける「大札」という歓迎の儀式や、父親が四十年以上前に

送っていた柿の苗木が大きく育っているところなど、読み応えのある箇所がいくつも登場する。

最終的に正敏は、自分は帰化せず、子どもたちには自分の意志で決めさせることにする。同じような結論にいたる、同行していた鉄男という男性の、一見無骨でありながら、デリケートな内面を抱えた姿も、じつに生きいきと描かれている。

『せる』第122号掲載の、西村郁子「縄文ダンス」も、傷つきが私のメンタルを慰撫してくれる作品だった。

主人公の沢田花林（さわだかりん）は、十三歳。十八歳のときから十五年勤めた会社が倒産し、東京から大阪の実家へ戻ることになる。とはいえ、父は花林が東京へ出たときに失踪し、それで半狂乱になった母はのちに癌を発症して死亡している。その葬儀にも帰らなかったのが花林。実家の近くには父の妹の叔母が唯一暮らしていて、死にいたる母を看取ったのもその叔母だった。

実家に辿り着くと、叔母がいて優しく迎えてくれる。叔母は花林の好物のすき焼きを作って一緒に食べながら、花林の父の居場所が分かっていると告げる。父の居場所を知らせるメールが届いた翌日、さっそく花林は奈良の橿原神宮の近くにいるはずの父を訪ねる。父を訪ねたあと、花林は太鼓の響きに導か

れるようにして、「ゲストハウス星谷」という不思議な場所に迷い込む。ここで花林は「まればと沢田」として歓迎され、おいしい料理をたっぷり味わったのち、ゲストハウスの客ヤスタッフとともにほじめての「縄文ダンス」を、太鼓の音、コーラスの声に合わせて、思わず知らず踊る。花林は自分の体が喜びに溢れる様にあっけにとられる……。

このあたりの作者の筆致はほんとうに素晴らしい。この縄文ダンスはあとで小さなカラスともなされるのだが、実家に棲みついている黒猫、カラス、ゲストハウス星谷の面々、これらよって、叔母に負い目を感じてばかりだった花林が生きなおよす方向が示されている。そして、それがやはりある種の宗教性をとどめている点にも留意しておきた。

『V I K I N G』第865号と866号に分載されている、長谷川和正「舞狂橋（ぶきょうばし）」は、兵庫県養父市に実在する橋を舞台にして、現世と来世をめぐって登場人物たちが絶叫するような対話を繰り返す、一四〇枚ほどの問題作。

新型コロナウイルスに感染した七十歳の「私」は、集中治療室での二週間を過ごしたのち、孫ほどの年齢、二十三歳の看護師「七海さん」に、自分が四十代半ばに体験した「不思議で少し怖い話」を聞いてくれるか、と言。「十分程度なら、いいですよ」という七海

に、その後「私」が語った内容が延々と綴られてゆく。

病院に医療器具を届ける仕事をしていた「私」は病院に車をおいて歩いていて、「円山鮎」という看板を見つけ、その鮎屋を目指すうちに、奇妙な無人の町に迷い込む。ようやく見つけた鮎屋の板前は五十代後半、注文を取る妻はその娘ほどの二十代半ば。やたら高いお品書きに驚きながら、何とか安い日替わりランチを見つけ、注文するとても美味い。店主は近くの「舞狂橋」の由来などを語る。

その半年後、今度は「私」は夜中の舞狂橋で若い女が欄干を歩いているのに出くわす。あの円山鮎の妻である。「危ない」と「私」は止めようとするが押し問答が続く、やがて「私」と鮎屋の妻は欄干で競うように逆立ちする。鮎屋の妻が川に落下したあと、鮎屋の亭主も現われ、結婚後三年で自分の浮気が原因で妻が自殺し、以後、妻は二十五歳のまま、自分だけが齢を重ねてきた、などと語る。その間、「私」は同時に奥歯の激痛に耐えかねている……。

結局は、七海という看護師に語っていると、いう設定自体を含め、コロナ感染のただなかの、「私」の妄想ないし夢ということになるのだろうが、何が現実か夢か、不確かななかで、歯の激痛だけが私たちの実在を教えてくれるという、かなり痛い作品だ。